**復活節第２主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年4月7日**

**「旅立ちの日に」**

**民数記27章15～23節**

**27:15 モーセは主に言った。**

 **27:16 「主よ、すべての肉なるものに霊を与えられる神よ、どうかこの共同体を指揮する人を任命し、**

 **27:17 彼らを率いて出陣し、彼らを率いて凱旋し、進ませ、また連れ戻す者とし、主の共同体を飼う者のいない羊の群れのようにしないでください。」**

 **27:18 主はモーセに言われた。「霊に満たされた人、ヌンの子ヨシュアを選んで、手を彼の上に置き、**

 **27:19 祭司エルアザルと共同体全体の前に立たせて、彼らの見ている前で職に任じなさい。**

 **27:20 あなたの権威を彼に分け与え、イスラエルの人々の共同体全体を彼に従わせなさい。**

 **27:21 彼は祭司エルアザルの前に立ち、エルアザルは彼のために、主の御前でウリムによる判断を求めねばならない。ヨシュアとイスラエルのすべての人々、つまり共同体全体は、エルアザルの命令に従って出陣し、また引き揚げねばならない。」**

 **27:22 モーセは、主が命じられたとおりに、ヨシュアを選んで祭司エルアザルと共同体全体の前に立たせ、**

 **27:23 手を彼の上に置いて、主がモーセを通して命じられたとおりに、彼を職に任じた。**

**使徒言行録13章1～3節**

 **13:1 アンティオキアでは、そこの教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったマナエン、サウロなど、預言する者や教師たちがいた。**

 **13:2 彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出しなさい。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」**

 **13:3 そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた**

**今日は4月7日。2024年度最初の主の日を迎えました。皆さんのお手元の週報も表紙が2024年度第1週になりました。また、教会目標も目標聖句も先日の定期教会総会で可決された今年度の新しいものになりました。いよいよ2024年度が始まったという新鮮な気持ちになります。「御言葉に生きる教会」この教会目標を心に留めて、御言葉をしっかりと味わって主に喜ばれる歩みを共にしていきたいと思います。**

**昨年度、私たちは主に使徒言行録から御言葉を聞いていきました。以前お話ししましたように、使徒言行録は12章までが第一部であり、13章からが第2部となっています。それまでユダヤ人だけに伝道をしてきた教会が、神様はユダヤ人も異邦人も分け隔てなららないお方であり、イエス・キリストは全ての人の救い主であることに気づかされたのです。そうして異邦人伝道に大きく舵を切っていくのです。そうやって異邦人伝道が本格的に始まる様子が13章から記されているのであります。**

**聖書の巻末にいくつか地図が載っています。その一つにパウロの伝道旅行の行程を記した地図があります。地図の７と８です。パウロはその生涯の中で3度伝道旅行（宣教旅行）に行きましたが、その最初の伝道旅行、いわゆる第一次伝道旅行と呼ばれているものがどのようにして始まったのかが今日の聖書箇所に記されています。地図の７のパウロの伝道旅行１はアンティオキアをスタートしてセレウキアに行き、キプロス島のサラミスに行ってというふうに地中海の島とその周辺をまわります。そのスタート地点が今日の聖書箇所のアンティオキア教会です。**

**まだ誕生してそれほど長い時間のたっていないアンティオキア教会ですが、エルレサム教会に援助の献金を送るほどに皆の熱い思いが溢れている教会です。このアンティオキア教会の指導的な立場にあるのが、バルナバ、シメオン、ルキオ、マナエン、そしてサウロ（後のパウロ）です。この5人は生まれも違えば考え方も違います。その5人がイエスを主として礼拝することにおいて一つでありました。互いの違いを上げれば争いが生じるでしょうけれども、違いは違いで認め合って、その上で主を礼拝することにおいて一つの教会としてアンティオキア教会は御言葉に聴いて、いわば御言葉に生きる教会として成長を続けていたのであります。**

**「有能な人たちがそろってきたからそろそろ外に向かって伝道しようか」アンティオキア教会のメンバーはそのように考えて、一緒に伝道計画を練って、どこに伝道しようかとか、誰を送りだそうかとか、そういったことを皆で協議をして「これで準備万端だから、さあ伝道開始だ！」と言ってサウロを伝道旅行に送り出したのではないことが今日の箇所ではっきりと記されてあるのです。**

**皆で主を礼拝していると聖霊が告げるのです。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出しなさい。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」（2節）**

**聖霊なのです。人の計画ではないのです。準備も何も整っていないかもしれません、人の目から見たらまだまだ伝道をするには力が足りないかもしれません、けれども聖霊が「さあ！わたしのために」と促すのです。原文では「すぐにわたしのために」です。「すぐにわたしのために」です「いますぐわたしのために」なのです。人間的に見てどうかは全く関係がない。神様が「すぐに、わたしのために」と言われるのです。**

**しかも神様は「私が前もって決めておいた仕事に当たらせるために」と言われるだけで、具体的にどのような目的のために二人をすぐに選べと言われているのかもわからないのです。準備も足りなければ、時間も足りない、力も足りない、さらにはそもそも神様が何をなさるのかもわからない、そのようなできないことや分からないことを上がればきりがない中で神様は「すぐに、わたしのために」と言われるのです。**

**そのような神様の言葉にアンティオキア教会はどのような行動を取ったのでありましょうか。それは、「そこで」断食して祈るのです。「そこで」は元は「その時」という意味の単語です。神様から言われて教会の主要メンバーで集まって話し合って時間をかけてではなくて、もう言われたその時、まさにその時すぐに彼らは断食して祈って、神様の御心を皆で求めて祈るのです。そして、祈りの中で神様の御言葉にすぐに応えて、バルナバとサウロを伝道に送り出すことが神様から自分たちに託された使命だと確信したのです。そして、バルナバとサウロの上に手を置いて、二人を伝道者として立てて送りだしたのです。**

**これがパウロの第一次伝道旅行の始まりなのです。異邦人伝道へ、さらに世界への伝道に広がっていく、そのきっかけとなった大きな出来事は、人間が話し合って決めたことではないのです。神様の導きなのです。「すぐに」と言われて「すぐに」祈って伝道者として送り出す。人間的に考えればできない理由は山ほどあります。しかし、アンティオキア教会はこれが神様からの召しであると信じて、神様に信頼して全てをお委ねしたのです。**

**神様から「すぐに」と言われて「すぐに」送り出した、神様を信頼して送りだしたその出来事が後に振り返ってまとめて書かれている箇所があります。それが14：21以下です。ここには「パウロたち、シリア州のアンティオキアに戻る」と小見出しで記されています。出発地点のアンティオキア教会のことです。パウロとバルナバが福音を宣べ伝えながらアンティオキアに引き返している様子が描かれています。**

**その26節にこう書かれています。**

**「そこからアンティオキアへ向かって船出した。そこは、二人が今成し遂げた働きのために神の恵みにゆだねられて送り出された所である。」（14：26）**

**ここにはっきりとアンティオキア教会はパウロとバルナバを神の恵みに委ねて送りだしたと書かれています。第一次伝道旅行はアンティオキア教会が神様の恵みに全てをお委ねして送り出した出来事であるのです。神様の恵みに全てをお委ねして全てを神様にお任せしたのです。**

**第一次伝道旅行そのものが神様のお導きであり、「すぐに」と言われて「すぐに」応えて送り出す、その旅立ちの日に教会がしたことは神様にお任せしたのです。全てを神様にお任せした。二人を召して下さった神様に全てをお任せしたのです。**

**全てを神様にお任せするというと、「あとは野となれ山となれ」のことわざのように神様に全責任を負わせてほったらかしにする、あとは知～らないと放り出すような印象を持ってしまうかもしれません。でも聖書がいう神様にお任せするということは自分は何もしないであとは神様が全部やってくれるでしょうという無責任なことではありません。**

**聖書が言う全て神様にお任せするというのは、最終的な責任は神様が取って下さるから、安心して神様から与えられた務めを一つ一つ祈りながら丁寧になすべきことをなしていくということです。神様がこの私を神様の御用のために用いて下さることを信じて、日々祈りつつ御言葉に聴きつつなすべきことをなしていき神様の御栄えを現していくのです。**

**それは、アンティオキア教会が神様に全てを任せるから自分たちは何もしなくても神様が勝手に伝道して下さって教会に人が増えるでしょ、自分たちは神様に丸投げだと無責任な態度を取らなかったのと同じです。すぐに二人を伝道者として立てるということが神様の召しであると確信して安心して伝道に送り出すことを通してなすべきことをなしたのです。それが教会が神様の恵みに委ねて、神様に全てをお任せしたということです。**

**2024年度が始まりました。私たちの教会は一人の姉妹を神様に全てをお任せすることから新年度の新たな旅立ちが始まりました。神の恵みに全てをお委ねしたのです。これこそが教会の姿ではないかなと思います。神様の恵みに全てをお委ねして、私たちはこの地上にあってイエス様の十字架と復活の喜びの福音を宣べ伝えて、日々祈りつつ御言葉に聴きつつなすべきことをなしていき、神様の御栄えを現していくのです。「御言葉に生きる教会」として、祈りの共同体、慰めの共同体、伝道する共同体として歩みを続けていきましょう。**